

入選作品発表

言葉が響き合う学級を 目指して

—— 声・聞くこと・思い・自信を
活動の中心にして ——

新潟県長岡市立豊田小学校教諭 笠井 悠

I. はじめに

私は、子どもに、次の力を育てたいと考えている。

- ① 自分の思い・考えを言葉にして、周りの人に伝えることができる力。
- ② 周りの人の言葉を理解して、自分の行動に生かしたり、その言葉に対する考えを伝えたりすることができる力。

この力のある子どもが、様々な面でより力を高めていく姿に多く出会ってきたからである。そして、一人一人がこの力を高めた学級は、互いの言葉を大切にする集団になる。私は、そのような学級を「言葉が響き合う学級」ととらえ、目指している。

この考えを明確にもつようになったときに担任したのが2年生、23人の子どもたち。出合いのとき、ピシッと揃った挨拶が返ってきた。一方で、冗談への反応が乏しいことに戸惑った。特に、表情や姿勢の「硬さ」が気になった。

思いを伝えることが苦手な子、自分の考えを熱心に話す一方で、周りの人の考えには関心を示さない子に、「うしろなさい」と直接的に指導したり、叱ったりしても、「硬さ」は増す一方

であった。このようなかわり方では、目指す姿は遠ざかるであろうとも感じた。

そこで、言葉が響き合う学級を目指して、子どもの力を一つ一つ育てていく取組が必要であると考えた。その柱とした考えが、次の4つである。

- ① 声を鍛えること。
- ② 聞く力を育てること。
- ③ 伝えたい思いをつくる機会を設けること。
- ④ すべての活動の支えとなる自信を育てること。

そして、それぞれに関して活動を設定することによって、言葉が響き合う学級に近づいていくと考えた。

II. 活動の構想

(1) 声を鍛えるー距離選択式の暗唱ー

教室の全員に届く声を獲得させたい。声が届かなければ、思い・考えは伝わらないからである。当然、声を出すことが苦手な子、声の大きさの感覚をつかめていない子がいる。

そこで、距離を選択する暗唱を行う。暗唱テストで、聞き手からの距離(50cm、3m、6m)

を選ぶのである。①声の大きさに応じて距離を選択できること、②テストによって成果がわかることが、声を鍛えることにつながると考えた。

(2) 聞く力を育てる

— 交流形態を發展させるスピーチ —

話し手が全員に届く声で話した際、聞き手がその内容を理解することによって、話し手の思い・考えは生かされる。そこで、聞く力を育てることが必要となる。

そのために、交流の形態を發展させるスピーチを行う。發展の仕方は、話し手が一人から複数人に、聞き手が聞くだけから聞いて紹介する役割になるといふものである。①「紹介する」という目的によって聞く態度ができること、②毎日の活動で「聞いて伝える」経験が積み重なることが、聞く力を育てることにつながると考えた。

(3) 伝えたい思いをつくる—全員で取り組む

— 二重跳び、方針を選択する学級会 —

周りの人に伝えたい思い・考えをもつ機会を設定する。伝える目的があるからこそ、声や聞く力が生かされるからである。

そこで、2つの活動を行う。一つは、全員で取り組む二重跳び、もう一つは、方針を選択す

る学級会である。共通するポイントは、次の2つである。

①できたことやしたいことなどの伝えたい思いをもちやすい。

②共通の体験や共有しやすい話題によって、言葉が伝わりやすいものになる。

2つの活動の概要を紹介する。

ア・全員で取り組む二重跳び

短縄の二重跳びに全員で挑戦し、全校の前で発表することが目標の活動である。喜びや悔しさを共有したり、励まし合ったりできる。その言葉は互いの心に響くものになり得る。

イ・方針を選択する学級会

全員が納得して進めるべき内容を話題とする学級会。自分の思いを話す姿や他の人の考えを理解し、関連付けて話す姿が期待できる。

(4) 自信を育てる

— 素敵な姿を伝える学級通信 —

これらの活動をより充実させる要素は自信である。そこで、学級通信で子どもの素敵な姿を伝える。配付時に読み聞かせをし、全員に、よさを具体的に伝える。家庭でも褒められる機会が増え、より自信を高めることが期待できる。

Ⅲ. 活動の実際

各活動の実際や成果を紹介する。なお、学級通信の取組は各活動の中で紹介する。

1. 距離選択式の暗唱—声を鍛える—

(1) 活動の導入と基本的な枠組み

国語の授業開きで活動を始めた。挑戦したのは詩「たんぽぽ」(作・まどみちお)。「覚えられないかな。」と様々な音読を行った。そして、テスト。2回目までに全員が合格。早速、学級通信(資料1・82ページ)でその様子を伝えた。その後の基本的な枠組みは、次の通りである。

- ① 課題は詩や文章とし、個人の暗唱カードに書く。
- ② 国語や学級活動に、暗唱のテストを行う「暗唱タイム」を設定する。
- ③ 暗唱タイムでは、3つの距離から立ち位置を選ぶ。
- ④ 合格したら、カードにシールを貼り、日記を書く。

(2) 動の成果

暗唱に楽しんで取り組んだ。「暗唱タイムにします。」と言うと「やったー。」とカードを取



〈資料1 暗唱全員合格を伝える学級通信〉

りに行く。番が来ると、決めた立ち位置に弾むようにして向かう姿も見られた。学期末の「楽しく暗唱ができましたか」への3段階での回答は、全学期で「とても楽しくできた」が8割以上、残りの子ども「楽しくできた」であった。

楽しむ中で、教室全体に伝わる大きさの声を着実に身に付けていった。授業で、話し手の手の小ささによって聞き手が言い直しを求めることがなくなった。立ち位置は、4月上旬時〔50cm：11人、3m：7人、6m：5人〕であったが、12月下旬時には〔50cm：3人、3m：8人、6m：12人〕となった。

2. 交流の形態を発展させる スピーチ活動 聞く力を育てる

(1) 活動の基本的な枠組み

- ① 朝の会に「スピーチタイム」を設定する。
 - ② 聞き手は、質問をしたり、感想を言ったりする。
 - ③ 質問をしたり、感想を言ったりした子どもは、朝の会終了後、シールをもらう。
- この目的は、質問・感想の機会の保障である。質問・感想の挙手の際に、手でシール数を表す。数が少ない子が指名される。

(2) 交流形態の4段階と子どもの姿

子どもの具体的な姿や成果は、活動のはじめである1段階とまとめの4段階のみ紹介する。

- 1段階**：日直がスピーチをする。その他が聞き手となり、質問や感想を言う。
(4～7月)

4月上旬のスピーチは、「好きなスポーツはサッカーです。ゴールを決めるのが楽しいからです」というようなものであった。聞き手は反応が乏しかった。そこで、①スピーチは4文以上にする、②聞き手は質問や感想によって「しっかり聞いた」と伝えることを確認した。

- 2段階**：ペアの一方がスピーチ。それをもう一方が、感想を加えて紹介する。
(9・10月)

スピーチがペアでの1対1となり、聞き手は「紹介するために聞く」という目的をもつ。

- 3段階**：あるペアの聞き手が紹介したスピーチに、他の子どもが感想を言う。
(11・12月)

他のペアのスピーチに感想を言うために、聞くという目的が加わる。

- 4段階**：日ごとにくじでペアを決め、その後、前段階と同じ活動を行う。
(1～3月)

いろいろな人のスピーチを聞き、紹介する。1月上旬の活動の一部を紹介する。

ペアの窓側の人がかじを引き、指定された席へ。30秒のスピーチ開始。タイマー音で終了。

Aさん：お隣さんの話を紹介してください。
(7人が挙手。) Bさん。

Bさん：Cさんが好きな物は、こたつだそうですね。こたつで寝たりもするそうですね。潜って歌を歌ったこともあるそうですね。ほくは、こたつも好きだけど、ストーブのほうがいいです。付け足しの感想はありま

すか。

(10人が手を挙げる。)Dさん。

Dさん…私もこたつは好きだけど、去年は、
妹が生まれたばかりだったから、
こたつは使いませんでした。

Bさんは、Cさんのスピーチを聞きながら、
大きく頷いたり、驚いたようにのけぞったりし
ていた。関心をもって聞く態度が身に付いてい
る。また、Bさん・Dさんともに、Cさんの話
に沿って、自分の思いや体験を話した。聞いて
内容を理解する力が高まっている。この間、C
さんは少し照れたような笑顔であった。話し手
の自信にもつながった。

3. 全員で取り組む二重跳び

—思いをつくる—

(1)活動の展開

活動開始時の二重跳びの記録は、次の通りで
ある。

0回…14人 1回…8人 2～9回…1人
10回以上…0人

活動を進めていくと、他の学年の子や先生方
から「Eさん、二重跳び1回できたんだってね。」



〈資料2〉

という話を聞くようになった。子どもたちは、
自分や共に取り組む人ができたことを話してい
たのである。自分や共に頑張る人の喜びが、伝
えたい思いとなった姿であった。子どもの頑張
りは、学級通信で伝えていった(資料2)。こ
のような活動を続け、年度末には、記録が次の
ようになった。

0回…0人 1回…1人 2～9回…2人
10～29回…3人 30～59回…8人
60回以上…9人

(2)活動の成果—子どもの言葉から—

年度末の国語の作文から、この活動に関係す
る部分を抜き出す。

Jさん

連続ができるように、「できるだけぐつ
と回すんだよ。」というアドバイスをもら
ったり、はげましてもらったりしていまし
た。

Eさん

2月の終わりごろに、二重跳びが32回い
きなりできて、すごくびっくりしました。
Kさんに「すごいね。」と言われてうれし
かったです。

記録更新のために、特に努力した2人である。
その頑張りに合った助言や称賛の言葉だからこ
そ、心に残ったのであろう。

Iさん

家に帰ってお父さんに「二重跳び57回で
きたよ。」と言ったら、「すごいじゃん。そ
の調子で頑張れ。」と言ってくれました。

みんなの記録が出るようにIさんと一緒
に声をかけてこられたのもよかったです。

伝えたい思いの強さが、お父さんからの言葉

をはっきりと覚えていることに表れている。また、周りの人を励ますことができたことにも喜びを感じている。

Bさん

校長先生に毎日見せていたら、「あなたならできる」とはげましてくれました。ほくも30回跳べると思っています。(中略)
2年生が終わるまでには30回跳べるように練習して頑張りたいです。

校長先生からの一言を、これからの励みにしている。

4人の作文から、この活動が、共に頑張っている人・家族・先生との言葉のやりとりを生み、それが喜びや励みになったことがわかる。

4. 方針を選択する学級会

— 思いをつくる —

暗唱で鍛えた声とスピーチで高めた聞く力をもとに、方針を選択する学級会を4回行った。以下では、まず、3回目までの話題の背景を紹介する。次に、4回目の話合いの流れを紹介し、成果を検討する。

(1)9月下旬…「どこまで走れる？」は、続けるか、続けないか。」

校内持久走大会に向けて、「どこまで走れる？」という取組を行った。全員の走った距離を合計していくものである。目標を学校から約490kmの金閣寺に設定した。大会当日までの合計は310km。大会後の取り組み方を話題とする話合いを行った。

(2)10月下旬…「金閣寺到着パーティー」で、クラッカーを鳴らすか、鳴らさないか。」

(1)の目標達成を祝うパーティーの内容を決める話合いから生まれた話題である。

(3)1月中旬…「長縄大会の縄は、先生が回すのか、自分たちだけで回すのか。」

校内長縄大会のルールに「縄回しは、低学年の場合、先生が加わってもよい。」があった。

2年1組はどうするかを決める話合いである。
(4)2月上旬…「百人一首の挑戦を受けるか、受けないか。」

2年2組から百人一首の挑戦状が届いた。この対戦の意義を確かめる機会をつくりたいと考え、話合いを行った。

まずは、挑戦を受ける派の発言が続いた。「ずっとやってきたから強いはず。」「強いことを知ってもらいたい。」など、自分たちの自信を強調する意見が多く出された。

次に、受けない派の発言。「負けるかもし

れない。」「負けたら思い出にならない。」など、負けることを避けたいという思いが表明された。

それに対して、「負けるかもしれないというけれど、今日からたくさん練習すればいい。」「負けても2組との思い出ができる。」「と対戦のとらえ方に関する意見が出てきた。「2組も1組と思いつくりたかったから挑戦状を渡したのかもしれない。」「これには、「ああ」と、初めて気付いたというような最も大きな反応があった。

ここでようやく、負けることが嫌な理由が話された。「負けてからかわれたりするのが嫌だ。」「これには「負けたら得意なことだ挑戦状を出そう。」、そして、「2組はからかうなんてことはしない。」と根本的な意見も出された。

多数決の結果、挑戦を受けることとなった。

全員が一通り意見を出した後から(傍線部以降)の発言は、全てがそれまでの発言に正対したものであった。また、様々な反論が飛び交う中で、少数であった受けられない派が、負けることが嫌な理由を話すことができた。これは、聞き手一人一人に、どんな意見でも理解しようと聞

11月下旬から1か月間、留学生が来た。日本語を聞き取ることができ、少し話すことができるとRさん。彼の帰国後、お母さんからの手紙には、「日本の幼稚園で数週間過ごしたときは、馴染めず『行きたくない!』と連呼していた。

IV. おわりに

一人一人が伝えたい思いをもつとともに、話し手の言葉を理解する力や自分の考えを改めてつくり、伝える力が高まっていた。
翌日には、話合いの様子を学級通信にまとめ、配付時には、それぞれの意見のよさを伝えた。
(資料3 ※音声記録を基に、改めて上の記録をまとめたため、学級通信と多少の違いがある。)

く態度があったからである。



〈資料3 話合いの様子を伝える学級通信〉

そんな彼が『中央小学校楽しい!!』と毎日楽しく学校に通えたのも…」とあった。

実際、初めの数日間は落ち着かない様子であった。しかし、Rさんが落ち着いて過ごさきっかけがあった。授業で、Rさんが考えをなんとか話した際に、他の子どもたちが「わかる、わかる。」と言い、Rさんが伝えようとしていることを順々に話し始めた。私が「そういうこと?」と問うと、Rさんは「うん。」と、嬉しそうな表情をしたのである。このときから、学級の子と楽しそうに話したり、遊んだりする機会が増えていった。

この姿から、思いや言葉を理解し合うことがいかに大切であるかを考えさせられた。また、子どもたちが、Rさんの伝えたいことを理解しようとする姿、それを考え、自分の言葉で話す姿に、言葉が響き合う学級を目指した活動の成果が表れていると感じた。

しかし、このような活動を行う一方で、子どもの言葉を、私が押さえつけてしまっているのではないかと思うことが、まだまだある。

今後、子どもにも、思い・考えを言葉に伝える力や周りの人の言葉を理解する力を育てることに取り組んでいくとともに、子どもとのかかわり方を絶えず見直していきたい。

受賞の言葉

笠井 悠



長縄大会に関する学級会で「笠井先生もこのクラスの一人なんだから、頑張って縄を回してほしい。」と語る子、全校の前での二重跳び発表の中で「みんなが30回をクリアして行って『できない、できない』と不安だった」と切々と語る子の姿を、今でもはっきりと思い出すことができます。そんな素敵な姿に出合わせてくれた子どもたちの記録を残したいと考えました。

本実践の柱である「子どもにも、自分の思い・考えを伝える力、周りの人の思い・考えを受け止める力を育てたい」という私の願いは、前所属校の内藤智子校長からの学びが深く関わっています。毎月、私の授業を見て、子どもたちの育ちを語ってくださったことが基礎となりました。また、具体的な手立てでは、共に学んでいる同年代の教員仲間と実践を交流する中で、より確かなものになりました。関わらせていただいている方たちに感謝しています。

この教育記録を書くことを通して、自分の実践を見つめ直すことができました。現在共に過ごす大切な38人の子どものための関わりに生かすことができていると実感しています。

この受賞を励みに、自分の力量を高めるため、努力していきたいと思えます。ありがとうございました。